

《特別講演》

「足る足らんどう足らず魂胆」

——『タルタラン・ド・タラスコン』の模作、挿絵、翻訳について——

加 藤 林太郎

文学作品の表題が成句となって独り歩きを始めることがよくあるが、その見本は『狭き門』であろう。ところが「足る足らん〔……〕」は「狭き門」のような言葉の意味の転用とは言えず、むしろ地口に近い例である。しかも、主人公の名前がこのタルタランになったのは偶然だった。つまり、「どう足らず魂胆」だけがもとからあったのである。ドーデは1861年に、母方の年上の従兄アンリ・レノーとともに地中海を船で渡りアルジェリアを訪れた。狩猟好きの空想家だったこの従兄の前にライオン狩りが待っているはずだったが、ライオンはすでに過去の思い出に過ぎないことが、到着するとすぐに分かった。この当て外れの愚かな旅が『タルタラン・ド・タラスコンの大冒険』（文末に梗概）の原型『シャパタンのライオン狩り』（1863.フィガロ紙）を生み出した。レノーは断りもなくモデルにされた上シャパタンなるアダ名をちょうだいし、たいへん怒ったという。そこでル・プチ・モニトゥール・ユニヴェルセル紙に形を改めて再登場した時は、「シャパタン」は姿を消して「バルバラン」がこれに代わり、『バルバラン・ド・タラスコン』となったのである。ところが作品名の不運はまだ続くのである。タラスコンにバルバラン名の人物がおり、告訴騒ぎが持ち上がった。従って主人公の名は出版まぎわになってバルバランから再度変更されて、初めてタルタランとなったのである。作品のタイトルはこのように「足る足らん」の部分で迷走したのであるが、まさにそれはタルタランが滑稽人物であったからだ。

タルタラン三部作

「南フランスの人間はお喋り好きで怠け者でほら吹き」だという首都圏の人たちがもつイメージをもとに南フランス出身のドーデが作り上げた滑稽人物がタルタランの名を持って誕生したのは1872年のことであるが、滑稽人物は一度生まれ出ると、彼が引き起こす事件さえ取り替えれば無限のヴァリエーションが可能となる。『アルプスのタルタラン』（1885）ではタラスコンの町の登山クラブ会長のタルタランが次期会長選挙への危機感にかられてリギ山、ユングフラウに登頂し、さらにモンブラン山を目指す。会長の貫禄を示そうというのである。『タラスコン港』（1890）では、ベルギー人詐欺師にたぶらかされたタルタランに率いられ、遠くポリネシアの孤島に植民地新タラスコンを建設すべくタラスコン市民が大挙移住を敢行する。このように20年にわたる連

《特別講演》「足る足らんどう足らず魂胆」

作がタルタラン三部作となったのである。三作品の間にもおのずから違いがある。いずれの場合も冒険家として成功しタラスコンの町の人々に称賛されたいという虚栄心がタルタランの冒険の主たる動機といえる。しかしライオン狩りの夢に自から欺かれるのが第一作のタルタランだとすれば、第二作『アルプスのタルタラン』では同郷の誇大妄想家ボンパールの出まかせにタルタランはまんまと乗せられてしまう。ボンパールによればアルプス全山は一大観光会社が経営管理する巨大観光施設にほかならず、あらゆる有名な危険や遭難伝説もすべて作り物で、その実安全なものだという。このほらを鵜呑みにしたタルタランはクレヴァスに落ちようが雪崩が起きようがびくともしない。ところがモンブラン山の尾根道でボンパールが同行のタルタランに真実を告白したため、その実人一倍命の惜しいタルタランは震え上がってしまう。タラスコンの町の名物男、偉人となったためほら吹きとしては生彩を欠き始めたタルタランの前に新手のほら吹きが登場したのである。第三作『タラスコン港』の冒険はベルギー人の詐欺師自称モンズ公爵がポリネシアに所有すると称する島をタルタランに売りつけたことにより起こる。たぶらかされるのもっともで、今回は登山クラブ会長どころではない。タルタランは植民地総督に自ら就任し、町の人々に大臣の位や貴族の称号を与えることが可能となるのである。ただし第三作に至って、タルタランの虚栄心にとって危険もまた増大した。ライオン狩りが失敗に終わったことも、モンブラン山の登頂を果たさなかったことも幸い町の人々には知られずにすんだため、大狩猟家あるいは名登山家の虚名をタルタランは楽しんでこれたのだ。しかし新植民地タラスコン港へ英国の軍艦が現れ、島が実は英国領であるということが判明した時には、タラスコンの全市民がタルタランの大失態の目撃者とならざるをえない。虚栄家タルタランは自分の虚名の成り立つ条件（事実隠蔽の手段）を自ら捨て去って滅んだと言える。

ドーデはタルタランを三連作の主人公にしたがこの第三作の最後でタルタランは死ぬことになっている。しかしタルタランにはまだ使い残りの活力があったらしい。作者の死後も模作者が次々と現れて、タルタランはまだしばらく生き続けた。『タルタラン戦場へ行く』（アルマン・フルーランス、1919）、『タルタランの回想』（ピエール・パンシエ、1920）、『オーベルニュのタルタラン』（マクシム・ラスターユ、1926）はタルタラン自身を主人公としている。『ロシアにおけるタルタランの息子』（ルイ・ド・スーダック、1905）、『タルタランの息子』（マリウス・ジュヴォ、1906、劇）はタルタランの息子が主人公。しかし『タルタランの甥』（ピエール・デュランダル、1914）は左記のアダ名の青年が主人公だし、『名うてのベジュケのワロニヤ旅行』（ジュール・ソッティオ、1932）の主人公はタルタランの友人の薬剤師の名前をアダ名とするスペイン人薬剤師が主人公である。タルタラン自身が主人公となっても、すでに南フランスの有名な人におさまり、無様な失態は免除されており、その息子、二代目（原作には存在しない）が代わりに原タルタランの滑稽味を再現する役割を引き受けている。模作の中でも冗談の度合いが最も強いのは『タルタランの回想』ではなかろうか。ドーデをタルタランの伝記作者とみなし、真実を誤り伝えるドーデ作の『タルタラン伝』をタルタラン本人が回想を執筆して修正するというものであって、タルタランの滑稽な振舞いや失態はどれも「滑稽ならざる」出来事を誤り伝えたにすぎないということになる。模作の中には、タルタラン三部作の登場人物——アルジェリアでタルタ

ランの有り金をすっかり持ち逃げする自称モンテネグロの王子、ユングフラウ登頂を目指すタルタランを悩殺するロシアのテロリスト女性ソニア——が人物再登場よろしく出現する作品もある。一方模作で影の薄いのはタラスコンの町であろう。タルタランを取りまく滑稽な人達として重要なタラスコンの町の人々（ドーデによればこの作品のためタラスコン市民からひどく恨まれたという）が模作ではほとんど顔を見せない。いわば模作においてタルタランはデラシネしたのである。

タルタランの「ハンター+トルコ人」スタイル

さてそのタラスコンの町もやがてドーデとタルタランをすっかり許したものと見える。毎年6月に行われる「タラス祭」には1946年頃からタルタランも登場するようになった。タラスとは町の名の起りともなった怪竜で巨大な亀の姿をしている。伝説によればタラスは昔ローヌ河に出没しては人を食らい恐れられていたが聖女マルト様のおかげで退治されたという。今ではタラスコンの観光案内所にはこの怪物タラスとタルタランが町の人気者として観光客を迎えている。そのタルタランは図にもある通り赤いトルコ帽の着用がお決まりで、「ハンター+トルコ人」といったスタイルである。これはタルタランが勇躍(?) アルジェリアへ出発した時のいでたちなのである。ドーデと従兄も含め、アルジェリアへの旅行者は現地によくトルコ帽を着用に及んだそうであるから、このタルタラン・スタイルにはいささか自嘲の気味もあるが、もちろんタルタランの愚かな外観尊重主義の産物にはかならない。絵葉書によっては、ドーデの有名二作品を一枚の絵葉書にまとめて、風車小屋の前にこのスタイルのタルタランが構えるというものがあるが、挿絵のタルタランも迷わずにこのスタイルを踏襲している。ただし中には例外もある。図に見られる通り、デュフィの挿絵(1937)ではトルコ帽着用のタルタランはごく少ない。多くのページはタルタランすらおらず、デュフィ独特の風景画ばかりである。人気漫画家デュブーの挿絵(1939)もある。デュブーはすでにラブレーおよびヴィヨンの挿絵で以て有名であった。群衆、パニック、漫画的解釈が得意とするところで、ラブレー、ヴィヨンは絶好のテーマに事欠かなかったが、『タルタラン』にも面白い挿絵が出来上がっている。ただしデュブーのタルタランは約束のトルコ帽を最小限にしか着用しない。作者ドーデ自身がトルコ帽のことを話題にしている時だけで、他はすべて探検家がかぶるヘルメットである。ドーデの冗談をひねり直して常識的なかぶり物としたのは、デュブーの「漫画的解釈」かもしれない。

南フランス語とガレジャード

このように南仏の滑稽人物タルタランは『タルタラン・ド・タラスコンの大冒険』の後半(アルジェリア到着後)を一定のスタイルで押し通すのであるが、彼は一体どのような言葉を発する

《特別講演》「足る足らんどう足らず魂胆」

のか。作者が南フランスはニーム出身であるからには、当然南仏語まじりのお喋りがタルタランとその仲間の中に交わされる。ドーデは南仏方言、南仏なまりを乱用したわけではないが、やはり南フランス人らしい言葉が飛び出して笑いを誘うのは事実である。そこで我が翻訳者も作品中に散在するこの南フランス語を尊重して珍日本語を案出した。

タルタラン出発の朝、例の「ハンター+トルコ人」のスタイルでタルタランが現れた時、タラスコンの市民は一斉に«Turc !»と叫ぶ代わりに訛って«Teur !»と叫んだ。これを訳すのにある訳者は「とろこ人」、他の訳者は「トロコ人」とした。「トロッコ人」というものもある。ドーデによればタルタランらの言葉は大袈裟で滑稽なのであるという。このような母音の偏向もあれば次のような子音の過剰もある。『アルプスのタルタラン』の中で、皇帝暗殺をもくろむロシアの無政府主義者ソニアをなんとか政治活動から手を引かせようと熱弁をふるうタルタランの口から飛び出すと、«amour»も«amourrr»と«r»が三重になるのだが、これを単に「恋愛」と訳して引き下ならず「るるれんあい」と訳した名訳(!)も存在する。

作者ドーデ自身も冗談を飛ばす。開巻第一ページにあるのだが、タルタラン邸の庭木はどれもほるか熱帯の樹木（ただし盆栽サイズ）ばかりであるから、「タラスコンをさること1万リユー、中央アフリカのどまん中にいる思いがする」と作者はいう。ところがタラスコンから「1万リユー」行けば、地球をちょうど一周してタラスコンの町に戻って来るといふナンセンスに気づかないといけない。もちろん『タルタランの大冒険』の登場人物どうしても遠慮なく冗談を言い合う。このような南フランスの冗談をガレジャードという。タルタランの馬鹿げた狩猟行そのものがおそらくガレジャードである。仏和辞典で«galéjade»を見ればプロヴァンス方言として「(相手を煙にまく) 大ぼら」とされている。これがいささか訳者にも感染するらしい。例えば作品のある所で、タルタランを筆頭とするタラスコンの町の狩猟家たちによって狩り尽くされた後に只一匹踏みとどまっているしぶとい野兎がいて«le Rapide»とアダ名されてつけ狙われているというのが、岩波文庫の訳者小川泰一氏は

この兎は「^{はやぶさ}隼」(早兎の意か)と呼ばれている。

と訳した。()内は訳者の全くのサーヴィス、あるいは「乗った」訳文であろう。もちろんドーデの原文とは何の関係もない翻訳の遊びである。こう言ってよければガレジャードの雰囲気は感染する。第二作『アルプスのタルタラン』にはユーモラスな反響があったことが知られている。フランス・アルペン・クラブはドーデを名誉会員に迎えたそうだし、英国の登山家ウインパーはドーデを同好の士とみなし、近著を贈ったという。これらの愉快的やりとりもまた「相手を煙にまく大ぼら」つまりガレジャードの楽しみに惹かれた結果ではないだろうか。

〈付〉『タルタラン・ド・タラスコンの大冒険』の梗概

南フランスの小都市タラスコンの住人タルタランは、武具のコレクションに囲まれて冒険小説に読みふける。平和な町では冒険願望も空しく、もはや狩る獲物すらいな野原で、空へ投げ上げた帽子を射つ無邪気な競技で気を晴らす日々だ。ところが移動動物園が町へやって来た時、ライオンの檻の前で大言壮語したことからライオン狩りを実行せねばならぬ破目となり、タルタランの心の中でキホーテ・タルタランとサンチョ・タルタランは大喧嘩をするが、結局物々しく武装してアルジェリアへ出発する。現地でライオンはすでに姿を消しており、ロバを誤って射殺して弁償させられる。一方アラビア女性（実はにせ者）と恋におち、ライオン狩りを忘れて暮らす。狩猟家タルタランの現地での消息を求める故郷の新聞記事を目にしたことから反省心が起こり再び狩猟行が始まるが、同行のグレゴリー王子（実は泥棒）に有り金をすっかり持ち逃げされる。やっとなら射殺したライオンは寺院の寄付金集めを手伝う温かいライオンであったため、この事件で裁判にかけられる。なついたラクダにつきまといまわられて迷惑しながら恥づかしい帰国をすると、送ったライオンの皮がもとで故郷ではライオン狩りの英雄となっており、町をあげての大歓迎をうける。本人も失敗を忘れ果て英雄気分になってしまう。